

看護学生の乳幼児に対する関わり意識

— 学習の楽しさ経験が及ぼす影響 —

山口 雅子¹⁾, 中越 利佳²⁾, 内門 弘子¹⁾

1) 愛媛大学大学院医学系研究科

2) 愛媛大学大学院医学系研究科大学院

Recognition to babies and infants by student's nurse

Masako YAMAGUCHI¹⁾, Rika NAKAGOSHI²⁾, Hiroko UCHIKADO¹⁾

1) Ehime University Graduate School of Medicine

2) Ehime University Graduate School of Medicine, graduate student

I. はじめに

医学部看護学科では、看護の専門職の養成を旨として平成6年に設置された。看護師等養成所指定規則に則りカリキュラムが構成されている。専門分野として母性看護学は位置づけられている。専門教育科目として、「母性看護学概論」、「母性看護方法」、「母性生活援助論」、「女性医学」が開講している。選択科目としては「母性看護と生命倫理」が開講している。学生は母性看護領域における対象となる人々の特徴や健康問題に関する基礎的知識を学んでいる。

母性看護に関する学習は、看護の専門職としての学びだけでなく、講義や臨地実習を通して、自分の出生、親など今まで育ててもらった人々への感謝、生命の尊厳、望ましい親役割などについて考える契機になっている。

国のレベルでも次世代育成支援事業として、父性・母性の育成を図るために思春期における保健・福祉体験学習事業があり、乳幼児に触れ合う機会の提供が勧められている。少子化対策における母子保健として、子ども・子育て応援プランがあり、生命の大切さを理解させることが挙げられている。

我が国の乳幼児死亡率、周産期死亡率、妊産婦死亡率など母子保健指標は世界に冠たる水準を維持し

ている。しかし少子化で出生数は少なく、憂うべきことに親による虐待が広まっている。母性看護の学習を通して予期せぬ妊娠による人工妊娠中絶を減少させるなど自己の母性や父性意識を発展させ、子どもの望ましい養育環境づくりに繋がることを願っている。

松村によれば「母性意識」は「母性という用語をどのように認識しているか」と「乳幼児に対する関わり意識をもっているか」の2つの要素によって構成され、「母性に関する認識」は「乳幼児に対する関わり意識」を規定する関係にあり、ひとりひとりの人間が持つ知識や経験によって変化し体制下され「母性意識」になる。乳幼児に対する関わり意識とは、「可愛い、抱きしめたい、オムツ交換などの汚い世話はしたくない、よく泣くので関わりたくない」などについてどのような意識を持っているかで、肯定的意識と否定的意識からなる¹⁾。

本研究の目的は、学生がどのような「乳幼児に関する関わり意識」を持っているかを知ることと、母性看護学の学習が楽しいか、そうではないかにより「乳幼児に対する関わり意識」について違いがあるのかどうかを明らかにすることである。母性看護学の講義を通じて母性・父性意識を高め効果的な母性看護学の教授法を検討するための基礎的資料とすることである。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査対象者は医学部看護学科の3年生と4年生である(編入生を除く)。3年生は、63名(男性6名, 女性57名)であり、4年生は、60名(男性5名, 女性55名)である。

2. 調査時期

調査は、平成20年7月下旬に実施した。調査時点において、3年生と4年生ともに専門基礎(教育)科目、専門(教育)科目(看護管理学を除く)の講義をすべて受講している。3年生は、母性看護学実習、小児看護学実習、成人看護学実習、精神看護学

実習、地域看護学実習、在宅看護学実習、老人看護学実習、看護管理学実習等の実習科目は未履修である。4年生は、看護管理学実習のみ未履修である。

3. 調査方法

放課後に質問紙調査を実施した。協力の得られた対象者は、3年生47名(男性3名, 女性44名)、4年生39名(男性5名, 女性34名)である。

4. 調査項目

対象者の個人的属性、乳幼児に対する関わり意識、母性看護学の学習に関することを分析項目としている(表1)。乳幼児に対する関わり意識については、前述の松村の許可を得た上で「乳幼児に対する関わり意識尺度」¹⁾の一部を使用した。赤ちゃん

表1 調査項目の内容とカテゴリー

要因群	項目	カテゴリー
属性	回答者の属性	1. 学年 2. 性別
楽しさ	母性看護学	1. とても楽しい 2. 楽しい 3. ふつう 4. あまり楽しくない 5. 楽しくない
乳幼児に対する関わり意識	(肯定) 1. かわいいので抱きしめたい 2. 自分も成長する 3. 自分をやさしい人間にする 4. 自分の表情を豊かにする 5. いとおしく守ってあげたい 6. 乳幼児と一緒に楽しい 7. 一緒にいると毎日に充実感がある 8. 気持ちが安定する 9. 乳幼児とかかわっているときが自分らしい 10. 自分が親になることがイメージできる 11. 乳幼児に一番の関心がある (否定) 1. 自分の思い通りにならない 2. 乳幼児と関わりと疲れる 3. 乳幼児と一緒にでは我慢することが多い 4. 自分は乳幼児に関わることに適していない 5. 人工妊娠中絶はやむをえない 6. イライラする 7. 乳幼児と一緒にでは気分転換できない 8. 活動が制限されてつまらない 9. 視野が狭くなる 10. よく泣くので関わりたくない 11. 何かものたりない 12. 楽しみや趣味をもてない 13. おむつ交換など汚い世話はしたくない 14. 世間から取り残される	1. 全く違う 2. 違う 3. どちらでもない 4. そのとおり 5. 全くそのとおり

と新生児に対する意識で入学してから変化したことについて自由記載をもとめた。

5. 分析方法

本研究では、収集したデータは項目別に単純集計を行った。母性看護学の学習の楽しさ経験の程度により、回答者を満足群と不満足群の2群に分け、母性看護学の講義の質的参与における乳幼児に対する関わり意識の相違点を検証するためにt検定により有意差を検定した。統計ソフトはSPSS14.0Jを用いた。

本研究では、チクセントミハイの「フロー理論」に基づき、母性看護学の学習における楽しさ経験を4段階尺度でたずねた。フローとは物事に没頭しているときに感じる高い満足度を意味している²⁾。

III. 倫理的配慮

調査はすべて無記名で参加は自由意志であること、データは統計的に処理し個人が特定されないこと、不参加および途中でやめることにより不利益をこうむることはないことを口頭で説明し同意を得た。なお本研究は愛媛大学医学系研究科倫理審査委員会の規定に沿っている。

IV. 結果及び考察

有効回答票は、78票であった。質問紙を分析した結果、次のことが明らかとなった。

1. 対象者の属性

3年生39人(50.0%)、4年生39人(50.0%)である。男性7人(9.0%)、女性71人(91.0%)である。

2. 楽しさ経験

母性看護の学習に関する楽しさは「とても楽しい」と答えた者が12.8%、「楽しい」は43.6%である。「ふつう」は37.2%である。「あまり楽しくない」5.1%、「楽しくない」1.3%であった。講義を行う上で講義が楽しいか楽しくないかは大変重要な事だと考えている。楽しいからこそ学習への好奇心も高まり、自ら更に学んでいくものである。

看護師のような専門職は、大学での教育は基礎教育であり、卒業後、看護師である限り継続して学んで

いく必要がある。講義を通して学習の楽しさを知り、生涯学習に繋げることも大学教育の役目のひとつと思われる。「とても楽しい」、「楽しい」を合計すると56.4%と過半数を占める。はたしてこの数値は多いのか少ないのかは、判断がつかないが講義内容や教授法の改善に努め、ひとりでも楽しいと思う学生を増やしていくように研鑽することが教員としての課題である。

3. 乳幼児に対する関わり意識

乳幼児に対する関わり意識を探るため25項目について「全くそのとおり」5点、「そのとおり」4点、「どちらでもない」3点、「違う」2点、「全く違う」1点の5段階尺度で回答を求めた。得点の高かった項目を降順に示すと、「かわいいので抱きしめたい」4.47、「自分も成長する」4.32、「自分をやさしい人間にする」4.24、「自分の表情を豊かにする」4.23、「いとおしく守ってあげたい」4.23、「乳幼児と一緒に楽しい」4.17、「一緒にいると毎日に充実感がある」3.59である。いずれも乳幼児に対する肯定的な関わり意識である。

次に得点の低い項目を昇順に示すと、「世間から取り残される」1.85、「おむつ交換など汚い仕事はしたくない」1.92、「楽しみや趣味をもてない」1.95、「何かものたりない」1.95、「よく泣くので関わりたくない」2.10、「視野が狭くなる」2.21、「活動が制限されてつまらない」2.24、「乳幼児と一緒にでは気分転換できない」2.40である。得点の低かった項目は、すべて乳幼児に対する否定的な項目であり、否定的な関わり意識は低いことが示された。

育児否定の感情は低く、育児により人間的な成長が図れるなどの育児肯定の感情が高い傾向があることが明らかとなった。

「どちらでもない」と見なされる項目は、「乳幼児と関わっているときが自分らしい」2.95、「乳幼児と一緒にでは我慢することが多い」3.09、「乳幼児と関わると疲れる」3.13、「自分が親になることがイメージできる」2.74、「自分は乳幼児に関わることに適していない」2.73、「気持ちが安定する」3.28、「自分の思い通りにならない」3.46、「人工妊娠中絶はやむをえない」2.58、「乳幼児に一番関心がある」2.56、「イライラする」2.51である。これらの項目は、大学の講義や臨地実習で短期間乳幼児に接しても、判断が難しい項目である。実際に子育てをした経験者でない

限り、「全く違う」「全くそのとおり」などの回答は難しいと思われる。

次に「自分が親になることをイメージできる」の得点分布を詳しく見てみると「全く違う」20.5%、「違う」32.1%、「どちらでもない」28.2%、「そのとおり」14.1%、「全くそのとおり」5.1%である。自分が親になることがイメージできる学生は2割に満たず、過半数はイメージできない。家族計画の基本理念である「生まれてくるすべての子どもは、すべて待ち望まれて生まれてこなければならない」は、生まれてくる子どもに対して、親としての責任を自覚したうえで、子どもを生み育て健康な家庭を築かなければならないということである。

彼らは、親になる自覚がない状態であることが窺える。しかしながら、性活動が活発な者がいることが問題である。

「人工妊娠中絶はやむをえない」を見てみると「全くそのとおり」3.8%、「そのとおり」16.7%、「どちらでもない」33.3%、「違う」25.6%、「全く違う」

20.5%である。人工妊娠中絶をしないで出産に踏み切っても子どもの虐待という問題が生じる恐れがある。子ども虐待のハイリスクには、親になるための準備不足がある。育児力がない。経済状況が安定していない。夫婦関係が良好でない、あるいは未婚など。また望まぬ妊娠が子どもとの愛着形成を阻害する。少なくとも親になるための自覚ができていない状況で性交渉を持つべきではないことを彼らに教授する必要性は高い。

4. 母性看護学の学習の楽しさ経験からみた乳幼児に対する関わり意識

母性看護学が「とても楽しい」「楽しい」と回答した者を満足群とする。「ふつう」「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答した者を不満足群とする。満足群44人(56.4%)、不満足群34人(43.6%)である。

両群で有意な差が見られた項目は、「いとおしく守ってあげたい」で満足群は4.45に対し、不満足群

表2 乳幼児に対する関わり意識

乳幼児に対する関わり意識	全体平均点	満足群 (n=44)	不満足群 (n=34)
かわいいので抱きしめたい	4.47 ±0.89	4.61 ±0.62	4.29 ±1.14
自分も成長する	4.32 ±0.78	4.34 ±0.78	4.29 ±0.84
自分をやさしい人間にする	4.24 ±0.94	4.48 ±0.66	3.94 ±1.15 *
自分の表情を豊かにする	4.23 ±0.93	4.50 ±0.63	3.88 ±1.12 *
いとおしく守ってあげたい	4.23 ±0.85	4.45 ±0.63	3.94 ±1.01 **
乳幼児と一緒に楽しい	4.17 ±0.84	4.43 ±0.59	3.82 ±1.00 *
一緒にいると毎日に充実感がある	3.59 ±1.04	3.75 ±0.87	3.38 ±1.21
自分の思い通りにならない	3.46 ±1.00	3.27 ±1.00	3.71 ±0.97
気持ちが安定する	3.28 ±0.98	3.50 ±0.88	3.00 ±1.04 *
乳幼児と関わると疲れる	3.13 ±1.02	2.98 ±0.98	3.32 ±1.07
乳幼児と一緒にでは我慢することが多い	3.09 ±1.00	2.95 ±0.86	3.26 ±1.14
乳幼児と関わっているときが自分らしい	2.95 ±1.01	3.23 ±0.94	2.59 ±0.99
自分が親になることがイメージできる	2.74 ±1.20	2.89 ±1.19	2.56 ±1.21
自分は乳幼児に関わることに適していない	2.73 ±1.08	2.48 ±1.05	3.06 ±1.04 *
人工妊娠中絶はやむをえない	2.58 ±1.11	2.59 ±1.11	2.56 ±1.13
乳幼児に一番の関心がある	2.56 ±1.10	2.77 ±1.12	2.29 ±1.03
イライラする	2.51 ±1.13	2.27 ±1.07	2.82 ±1.14 *
乳幼児と一緒にでは気分転換できない	2.40 ±0.96	2.25 ±0.87	2.59 ±1.05
活動が制限されてつまらない	2.24 ±1.00	2.07 ±0.87	2.47 ±1.11
視野が狭くなる	2.21 ±0.90	2.09 ±0.88	2.35 ±0.92
よく泣くので関わりたくない	2.10 ±1.04	1.95 ±0.96	2.29 ±1.12
何かものたりない	1.95 ±0.82	1.95 ±0.94	1.94 ±0.65
楽しみや趣味をもてない	1.95 ±0.95	1.66 ±0.68	2.32 ±1.12 *
おむつ交換など汚い世話はしたくない	1.92 ±0.89	1.70 ±0.73	2.21 ±1.01 *
世間から取り残される	1.85 ±0.93	1.66 ±0.91	2.09 ±0.90 *

* < .05

** < .01

は3.94である。満足群は不満足群よりも乳幼児を「いとおしく守ってあげたい」と思う気持ちが有意に高い ($p < .01$)。同様に「自分をやさしい人間にする」は、満足群は4.48に対し、不満足群は3.94である ($p < .05$)。「自分の表情を豊かにする」は、満足群は4.50に対し、不満足群は3.88である ($p < .05$)。「乳幼児と一緒に楽しい」は、満足群は4.43に対し、不満足群は3.94である ($p < .05$)。

「いとおしく守ってあげたい」、「自分をやさしい人間にする」、「自分の表情を豊かにする」、「乳幼児と一緒に楽しい」は、満足群が不満足群よりも有意に同意する程度が高いことが明らかとなった。肯定的な他の項目も統計学的には有意な差は認められないが、いずれも満足群が高い傾向は示されている。

次に得点の低い項目で有意差があった項目を示すと、「世間から取り残される」は、満足群は1.66に対し、不満足群は2.09である ($p < .05$)。満足群は不満足群よりも更に「世間から取り残される」と考える程度は少ないことが明らかとなった。「おむつ交換など汚い仕事はしたくない」は、満足群は1.70に対し、不満足群は2.21である ($p < .05$)。「楽しみや趣味をもてない」は、満足群は1.66に対し、不満足群は2.32である ($p < .05$)。

育児に対する否定的な「世間から取り残される」、「おむつ交換など汚い仕事はしたくない」、「楽しみや趣味をもてない」は、満足群が不満足群よりも有意に否定する者が多いことが明らかとなった。

「どちらでもない」の回答が多かった項目にも両群で有意な差が見られた項目があった。「気持ちが安定する」は、満足群3.50に対し不満足群は3.00である ($p < .05$)。不満足群は「どちらでもない」であるが満足群は肯定するものが多いことが示された。「自分は乳幼児に関わることに適していない」は、満足群2.48に対し不満足群は3.06である ($p < .05$)。満足群は否定するものが有意に多い。「イライラする」は、満足群2.27に対し不満足群は2.82で「イライラする」と思わない者が満足群に多く有意差が認められた ($p < .05$)。肯定的な項目は満足群に肯定するものが多く、否定的な項目は不満足群に同意するものが多いことが示された。

母性看護学学習の楽しさ経験は、乳幼児に対する関わり意識に一部影響を与えていることが明らかとなった。学習を楽しんでいると感じているものは、乳幼児に対し肯定的なイメージを抱いている結果が示され

た。また否定的なイメージを抱くことが少ないことも示された。乳幼児に対する関わり意識、つまり生来、母性意識が高いので母性看護学の学習は楽しく受講できたと考えることもできる。いずれにせよ母性意識を高め、虐待などの不適切な養育態度を取らないように何らかの役割を母子看護の講義は果たせるものとする。受講生が将来子どもの親となった時、また看護職として出会う人々に対しても良い働きかけができれば大変喜ばしいことである。

母性看護学の講義が楽しかった、楽しい経験を積んだと思われるような講義をすることの重要性が示唆される結果であった。

5. 赤ちゃんと新生児に対する意識 (自由記載)

大学に入学後、赤ちゃんや新生児に対する意識で変化したことについての自由記載の内容を満足群と不満足群の別に以下に示す。新生児とは、出生時から生後28日未満の乳児のことであり、子宮内の生活から子宮外の生活へ適応する過程にある。3年生は、乳児や新生児について講義で学んだ状況であり、4年生は母性看護学や小児看護学などの実習を経験しての記述である。4年生は実習が楽しかったかどうかに関して調査しているが今回の発表では割愛する。

自由記述においても、満足群と不満足群の記述内容に違いがあることが読み取れる。記載者数や記載された字数にも違いが見られる。

(1) 満足群

1) 赤ちゃん

- ・赤ちゃんは泣くし、育てるのは大変だと思っていたが、赤ちゃんが泣くのは理由があるので泣くことに意味があるのだと思えるようになった。発達段階に応じた赤ちゃんの行動を学び赤ちゃんの見方が変わった。
- ・自分も赤ちゃんが欲しくなった。以前は自分で育てる自信がなかったが、少しは知識も増えたので自分でもできるのではないかと思えるようになった。
- ・一人一人がすでに人格を持った一人の人間だと捉えるようになった。
- ・出産に対して甘い考えしかもっていなかったけど、赤ちゃんは望まれて生まれてくるべきだと感じるようになった。
- ・赤ちゃんはかわいくてみんなに愛されるが、実習

や学習を通して、細かい点まで気を配って上げる必要があると感じた。出生後の体重減少や黄疸など正常な変化であることは、学習するまで知らなかったもので、普通の妊産婦さんも知らない人がいると思う。そのような点をきちんと指導し、妊婦の不安を減らす必要があると思った。

- ・赤ちゃんという一くくりのなかに新生児、乳児、幼児など段階に分けられていることが解った。
- ・赤ちゃんも、ちゃんと自分の意志を持ち、伝えていることが解った。
- ・赤ちゃんって不思議だと思っていたけれど、赤ちゃんの反応や発達について学習したので少し距離が近づいたと思う。でもますます赤ちゃんって不思議だなと気持ちも出た。
- ・赤ちゃんはかわいくてきれいなものだと感じていたけど、生まれてすぐはテレビドラマみたいに純粹にかわいいものではないし、汚い部分もあって、だからこそ私たちができない部分を補ってかわいがる必要性があると思うようになった。
- ・妊婦さんはとても大変で赤ちゃんを産む前にたくさん色々なこと（検診、心の準備、呼吸法 etc）をしておかなければならないことをはじめて知った。赤ちゃんが産道からどういう風にして出てくるのかを知って驚いたし、頭の形がなんで細長いのかを知ることができて満足している。赤ちゃんに害を及ぼさないように、母体は様々なことに注意をしなければならないと思った。
- ・母乳育児成立のための10か条を読んで赤ちゃんは母乳で育てようと思った。出産したりこれから出産を控えている友人が多くいるので、みんなに「できれば母乳で育ててあげてね。」と言っている。赤ちゃんにとっても母親にとっても母乳はメリットが多いと解った。
- ・凄く繊細な生き物だと思った。赤ちゃんもがんばっているのだと思った。
- ・中絶は本当に避けるべきだと思った。
- ・弱いものというイメージから学習することによって逆に強いものではないかと思えるようになった。かわいらしいものというイメージは変わらない。
- ・実習を通して母親は生まれる前からすごく子のことを想って、愛していると思った。子どもは宝物といわれている理由がよくわかった。
- ・単にかわいいとだけ思っていたが、赤ちゃんの発

達度合いを見て何ヶ月か推察したり、母親とのかかわりを観察するようになった。

- ・かわいく、すなおで健康
- ・小さくて健気な存在。守ってあげたくなる。
- ・小さくて繊細なイメージだったが、実習を通して力強く、元気、活発なイメージを持つようになった。
- ・触るのが怖いし、好きではなかったが、今は母親になってみたいと思う。
- ・今までは、かわいいというイメージだけだったけど、疾病など考えるようになった。
- ・凄く弱いものを想像していたが、実際に学習したり、実習で触れると強い一面もあると学んだ。
- ・成長、発達の著しさに驚いた。

2) 新生児

- ・新生児はデリケートである。
- ・思っていた以上に複雑。正常値も病気も大人とは全然違うことが解った。
- ・一人一人がすでに人格を持った一人の人間だと捉えるようになった。
- ・病気などしやすく弱い存在。
- ・たくさんの病気の種類がある。
- ・著しい体の変化があることを知った。
- ・母親と看護師の両方の視点から見れるようになった。
- ・新生児はこれから生きていくためのさまざまなものを取り込んでいく最初の時期だと思った。吸吮反射や口唇追いかけて反射など生きていくうえで必要なものを備えて生まれてきていてすごいと思った。
- ・生まれてくるときには、意外に大きくなっているんだと思った。
- ・様々な疾患にかかりやすいので、生まれてきてからの観察がとても大事だと思った。
- ・新生児はすごくたよりなくて、弱い感じがしたけれど、本当は強いものだと思った。
- ・凄く繊細な生き物だと思った。赤ちゃんもがんばっているのだと思った。
- ・中絶は本当に避けるべきだと思った。
- ・能力を獲得する時期
- ・意外に強いと思うようになった。
- ・生まれたての子どものイメージ
- ・生まれて間もない、本当に新鮮な気持ちにさせてくれると思う。

- ・新生児と聞くとなぜか病院をイメージしてしまう。
- ・繊細で病気になりやすい時期，気難しい。
- ・守ってあげたくなる。なんらかの意思表示も汲み取ってあげたくなる。
- ・触る機会なんてないと思っていたが，自分でも世話ができたので自信になった。
- ・様々なことに気をつけてみていかなければならないと学んだ。
- ・接し方や母子関係の大切さを改めて感じた。
- ・新生児は大きさ，体重に差があることに気がついた。

(2) 不満足群

1) 赤ちゃん

- ・ただかわいいだけではない。
- ・今まで赤ちゃんとあまり関わったことがなかったのでビデオを見たり，演習を行うことで赤ちゃんに触れ合いたいと思うようになった。
- ・少しは知識も身につけて，全く知らないときよりも科学的な目で見れるようになった。
- ・育児は大変である。
- ・ものすごくかわいい。
- ・かわいいだけが赤ちゃんではない。汚い部分もあるし，しんどいこともある。大変だと思う。
- ・弱々しいイメージがあったが，実際に関わると強く，多くの能力を秘めていると解った。
- ・怖い，苦手と感じていたが，実習に行き，かわいいと思うようになった。
- ・とてもかわいらしいイメージ
- ・授乳のことが気になる。おっぱいの出方や赤ちゃんの飲み方など。

2) 新生児

- ・ケアが多い
- ・知識が増えた。
- ・以前は強い生命力のイメージだったけど，今は新生児に対して，弱くてもろいイメージもある。
- ・意外と頑丈だと思った。
- ・怖い，苦手と感じていたが，実習に行き，守ってあげなければいけないと感じるようになった。
- ・新生児という区別すら知らなかった。
- ・壊れそうで怖い。
- ・元気で当然というイメージがあったが，そうとも限らない現実を知った。
- ・産まれてから1週間での変化が大きいことがわ

- かった。生まれたての子はシワシワに見えた。
- ・怖いし，か弱いイメージだったが，か弱いけれども強くもあるという印象になった。
- ・産まれたての認識が強くなった。
- ・専門的な目で見ている。

VI. ま と め

1. 母性看護学の学習を楽しいと答えた者が半数である。
2. 乳幼児に対する関わり意識は肯定的である。
3. 母性看護学の学習経験の満足群と不満足群で乳幼児に対する関わり意識に相違点が認められ，満足群に肯定的な考えを持つものが多い傾向が示された。

文献

- 1) 松村恵子 (2005) 「母性意識を考える」. 文芸社
- 2) チクセントミハイ (著), 今村浩明 (訳) (1991) 「楽しむということ」. 思索社